

新課程入試に対応するための 進路希望を 明確化させる指導

大学入試に向けた切り替え時期に当たる2年生2学期以降は、
進路希望の方向性を明確にすることで学習意欲を高める好機となる。
新課程入試に対応すべく、各校はどのような進路指導を行ってきたのか。

面談、進路学習、学び合う集団づくりなど、
進路希望を明確化させるための2年生後半以降の指導を中心にひも解いていく。

学校事例 ①

岩手県立盛岡北高校

節目の面談と志望理由書の作成で 「学びたい学問」を追究させる

生徒の理系・資格志向が 志望のミスマッチを生む

岩手県立盛岡北高校は、例年3

桁の国公立大合格者を出す進学校だ。現行課程に対しては、学力差の拡大を懸念し、対策を立てていた(本誌2012年12月号「新課程のファースト・ステップ」で紹介)。

結果的に、15年度入試の合格実績は例年とほぼ変わらなかったが、生徒の進路選択の過程には課題が見られた。保護者の意見で看護学部を志望する生徒、理系に適性があるにもかかわらず経済学部を第1志望に挙げる生徒など、3年次で志望学部を確定すべき段階になっても、自分の希望や適性と志望学部とが食い違う生徒がおり、中には浪人中に文転する生徒もい

たという。

生徒の強い理系・資格志向が目立つと、進路指導主事のおだしまよし小田島淑人先生は指摘する。

「理系の学部は就職に有利、とにかく仕事につながる資格を取った方がよいという一般的なイメージで、大学を志望する生徒が後を絶ちません。生徒自身が将来像を描けていないため、保護者の意向に左右されるケースもありました」

小田島先生が「現在進行形の課題」と語る生徒の進路選択に対して、同校ではどのように向き合っているのだろうか。

進研模試直前の面談で 進路希望を焦点化

進路選択での大きな節目として同校が意識しているのが、1年生

3学期の文理選択、及び2年生2学期に取り組む志望理由書の作成だ。文理選択に向けては、1年生の早い段階から入試関連の資料を基に説明会を行ったり、学年集会で呼び掛けたりして、安易な選択をしないように啓発している。

そして、進路希望を明確化させるために、1、2年生を通じて重視しているのが個人面談だ。現1年生では、前3年生での進路指導の経験を踏まえて、進路希望調査を例年より多く、年4回実施。二者面談・三者面談で生徒や保護者の意思を確認しながら、進学先へのイメージを膨らませ、3学期での文理選択へとつなげていく。

2年生では、年3回の進研模試の直前に行う面談を軸に、志望の焦点化を図っている。最も重視するのは、初めて志望校を記入する7月模試だ。2学年主任の高橋直文先生は次のように説明する。

「面談前に、ベネッセのハイスクールオンラインから『2年生7月模試の目標突破に向けた戦略シート』をダウンロードし、志望校や進研模試の目標点を記入させ

ます。それを見ながら、生徒一人ひとりと志望校について話し合い、好きな学問や将来希望する職業などから可能性を探っていきます」

10月になると志望理由書の作成に着手する。生徒が書いた原案を担当がチェックし、生徒はそれを基に修正する。修正とチェックを何度か繰り返し、11月には完成させる。ただ、その時点でも、明確に志望理由を述べられる生徒はそれほど多くないという。

「その職業に就きたいと思った『きっかけ』を、志望理由と勘違いしている生徒が少なくありません。『幼い頃、病院で看護師に優しくしてもらったから』というのはあくまでも興味を持ったきっかけです。志望する職業を通してどのように社会に貢献したいのか、自己実現を図りたいのかということまで深めていかなければ、本当の志望理由にはなりません」（小田島先生）

「学びたい学問」に こだわる進路指導に転換

一般的な志望校選択のプロセスとして、就きたい職業から逆算し

て志望校を考えさせる学校は少ない。同校の進路学習も、以前は職業研究↓大学・学部研究という流れだったが、今は大学で「学びたい学問」を重視した進路指導に転換しつつある。それは、14年度、1年生の進路ガイダンスで、当時の副校長が生徒に呼び掛けた言葉がきっかけだった。

「君たちが社会に出るのは7年後、大学院を入れれば9年後となる。今は好調な業界や職種も、その頃にはどうなっているかわからない。進路選択で迷っている生徒は、不透明な未来を心配するよりも、大学での4年間で本当に学びたいと思う学問に没頭しなさい」

高橋先生はこの言葉を契機に、自身の進路指導が変わったと話す。「副校長の言葉に後押しされ、最後の最後に自分の気持ちに従って進路目標や文理選択を変えたという生徒もいました。私自身、それまでは職業重視か学問重視かで迷い、『心理学を学びたい』という生徒に『それで生活が成り立つのか』などと揺さぶりを掛けたこともあり

ました。今は生徒の本当に学び



岩手県立盛岡北高校
小田島淑人
おだしま・よしと
教職歴25年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。



岩手県立盛岡北高校
高橋直文
たかはし・なおふみ
教職歴28年。同校に赴任して6年目。2学年主任。



岩手県立盛岡北高校
村上浩紀
むらかみ・ひろき
教職歴19年。同校に赴任して3年目。1学年主任。

◎「師弟和熟」を教育理念とし、勉学に励み自身を鍛える「青春道場」を目指す。◎全日制／普通科／共学／1学年約240人◎2015年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、北海道教育大、岩手大、東北大、筑波大、岩手県立大などに122人が合格。私立大は、学習院大、東京理科大、立教大などに延べ203人が合格。

たいという志が確認できれば、生徒の背中を押すようにしています」

進路学習の内容も、大学模範講義重視の方針に切り替えた。15年度の1学年では、社会人講師による講演に加え、大学模範講義も実施。更に、2学年では、2回行う大学模範講義のうち、10月分を1・2学年合同で行うことにした。2年生が活発に質問する姿に、1年生が刺激を受けることを期待する。1学年主任の村上浩紀先生はこう話す。

鹿児島県立加世田高校

2年生の修学旅行から春休みまで
意識を途切れさせない進路指導

急速な少子化により
学力・進路意識に変化

「私自身、数学が好きで、高校生の頃は就職のことなど考えずに大学の数学科に進みました。大学とは、本来そういうところなのだと思えます。大学の4年間で充実していれば人間的に大きくなれますし、たとえ職業に直結しない学問でも、一生懸命に学んできたことをアピールすれば社会も認めてくれるはず。好きな学問をとことん追究し、魅力あふれる人間に成長することで、おのずと未来は拓けるのではないのでしょうか」

今後の課題は、引き続き理系・資格志向の生徒との対話を大切にすることであり、そのためには「担任力」の向上が不可欠だと、小田島先生は語る。

「ここ数年、30代前半で採用される教師が増え、年齢相応の経験を積んでおらず、指導力が十分には付いていないケースが見られます。面談に説得力を持たせるためにも必要なのは、生徒との信頼関係です。1対1の対話を大切に、生徒のモチベーションを高めていけるよう、教師の指導力向上を促していきたいと思っています」

鹿児島県立加世田高校は、南さつま市にある地域を代表する進学校だ。100年以上の伝統を有し、地域の成績上位層が憧れる高校の1つだが、急速な少子化の影響で、ここ数年、学級減が続いている。学力も徐々に低下し、進路意識にまで影響を及ぼしているという。進路指導部主任の渡辺豊隆先生は、こう説明する。

「かつては、大半の生徒が『加世田高校に入ったからには、国公立大を目指したい』という意欲を持っていました。それが、現行課程になってから、入学段階での国公立大志望者が減少し始め、現2年生では50%にまで低下しました。学

力のみならず、進学意欲の喚起も大きな課題となっています」

自分の学力を客観的に見られず、実力がありながらも志望校を低めに設定する傾向もあるという。生徒が年々多様化していく中で、「元で難関大を目指し、志望を実現できる子どもを育てる」という目標の下、学力・意欲の向上を図ると、教師は奮闘している。

「志望大学別ゾーン集会」で
学び合う集団をつくる

同校が受験生への切り替え時期として意識しているのは、2年生2学期だ。12月の修学旅行を節目にして意識を高めていき、教師の異動などで指導が手薄になる春休みなどにしっかりと学習に取り組ませる。その上で、3年生1学期のイ



鹿児島県立加世田高校教頭
田嶋吾富
たじま・あつむ
教職歴27年。同校に赴任して1年目。



鹿児島県立加世田高校
當 武三
あたりに・たけぞう
教職歴35年。同校に赴任して9年目。3学年主任。



鹿児島県立加世田高校
渡辺豊隆
わたなべ・とよたか
教職歴19年。同校に赴任して8年目。進路指導部主任。

◎創立103年目。2014年度、鹿児島県の進学指導重点校の指定を受ける。◎全日制/普通科/共学/1学年約130人◎2015年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、東京外国語大、九州大、熊本大、鹿児島大、北九州市立大など59人が合格。私立大は、国際基督教大、西南学院大、福岡大など延べ130人が合格。

ンターハイ予選後に放課後学習の開始、入試に向けた標語づくりなどの諸施策を通して、最終的な切り替えを図るのが例年の流れだ。2年生前半は、グループで大学・学部研究を行って発表したり、ベネッセの「表現サポート」を使って志望理由を書いたり、志望への意識を徐々に深めていく。14年度の2年生には、10月にLHRを使ったクイズ形式での進路学習を行った。3年生の進学講演会の資

料を基に「何割の大学生が転部を希望しているか」「大学進学にかかわる費用は」など、進路選択にかかわる問題を選択形式で出題し、入試や進路選択の実態把握を促す。

一方、様々なカテゴリーによる集団づくりを通して、学習意欲を高めるのもこの時期だ。2年生9月には「志望大学別ゾーン集会」を実施。生徒数が少なく、志望大でグループ分けが出来ないため、「理系で個別学力試験に国語が課される大学」「個別学力試験で数学ⅠA・ⅡBが課される大学」など、入試の特徴に応じてグループを作り、ガイダンスを行った。年度によっては、GTZ(*)のゾーンの集会も開いている。

大学生主導のゼミを実施し 大学への憧れを喚起

例年、修学旅行は、東京の大学見学や卒業生との懇談会などを行い、生徒の意識を大学へ向けるためのキャリア教育の場にもしている。大学での学びを実際に体感させ、大学生活や学問への理解を深め、憧れを喚起することが狙いだ。

14年度は東京大・早稲田大の学生とのゼミ体験・懇談会を実施した。両校の学生がファシリテーターとなり、「新しい携帯電話のスタイルを提案しよう」というテーマで少人数グループによるゼミ形式の課題研究を行った。3学年主任の當武三先生は次のように述べる。

「生徒に与えた衝撃は大きく、『すぐにも大学に行きたい』という生徒がいたほどです。ゼミを主導した大学生の姿、彼らが語る学生生活の様子に大きな刺激を受けたのだと思います。教科担任からも授業態度が見違えるように変わつたという声が寄せられ、進路意識の向上が学習意欲を高めることを改めて感じました」

「レベルアップ40日作戦」で 3学期～春休みを乗り切る

修学旅行で高まった意欲を3年生まで持続させていくことも、この時期の大切なポイントである。同校では、1・2年生の各学年で、2月下旬～4月上旬の期間を「レベルアップ40日作戦」として有効に活用することを呼び掛けている。

田嶋吾富教頭は、取り組みの背景を次のように説明する。

「毎年、3学期から春休みの時期は、教師の入れ替えで慌ただしく、高校入試のための休日もあるため、生徒への学習指導が手薄になりがちです。しかし、2年生にとつては受験に向けた大切な時期です。スムーズに3年生につなげていくために、この期間を有意義に過ごさせることが重要だと考えています」

取り組みの目標は、「1年間の積み残しをしない」ことだ。学年末考査と進研模試の復習、春休みの課題などを実施する。これまで、他の時期の模試と同様、1月の進研模試も個票をそのまま生徒に渡していた。現在は、担任が2週間程掛けて生徒一人ひとりの個票をくまなく確認し、学習方法や結果に対するコメントを書き加えたり、大事などころにマーカーを引いたりして、3月上旬のLHRで渡している。教師が生徒の状況を詳しく把握すると同時に、手作り感のある個票を返すことで、生徒の意欲を高めたいと考えている。課題の出し方も工夫する。以前

は、高校入試期間と春休みを別々に捉え、それぞれに課題を出していたが、この期間を一続きとして捉え直し、2月末に5教科一括で課題を出すようにした。

「高い志望を実現するためには、主体的に学ぶ力を身に付けていることが重要です。課題提出までの期間を長く設定し、スケジュールを管理しながら主体的に学習に取り組む『段取り力』を身に付けてほしいと考えました」(渡辺先生)

今後も、引き続き学力層の拡大への対応が課題だと、當先生は話す。「成績上位層の生徒の減少もさることながら、度数分布の広がり近年の課題です。それぞれの学力層に対して、より一層きめ細かい指導が必要になるでしょう。現在、進路指導部を中心に、上位層の生徒に向けた添削指導や、下位層の生徒への基礎学力対策などの取り組みを整備しています。本校に期待して入学してきた生徒一人ひとりの志望を実現させたい、その思いを胸に、地道な取り組みを続けることが、少子化の中で本校が生き残る道だと考えています」

* ベネッセのテストにおける共通の評価指標。